

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.html  
E-mail:comm.tko@nsk.org  
PHONE:03-3433-0987  
FAX:3433-8678 Diocese Office

# コミュニオン

《ペンテコステメッセージ》

## その時は突然やってきた

### —あの日の出来事は

#### 今も続いている—

主教 アンテレ 大畑 喜道



久しぶりに教会の草むしりをしました。毎年花を咲かせていてくれた草が枯れてしまつてがっかりし、新しい花を植えようと思いつたからです。そうしたら枯れ枝だと思つていた所から新芽が吹き出していたのです。いままでは草に覆われていてしまつて、雑草に妨害されていましたが、今はすっかりきれいになりました。また花を咲かせ心を和ませてくれることを心待ちにしています。それと同じように、私たちには神様からの大きな恵みが与えられています。聖霊の働きが今日もあることを確認したいと思ひます。神様はいつも私たちを喜びに充ち溢れさせ、疲れた私

たちを癒してくださいます。しかしこれに対抗するかのようには、この恵みを妨害しようとする力が働きます。それは

発させてくださいます。「聖霊来て下さい。」と本気で祈るならば、すべての人に聖霊が働き出します。そして私たちの想像を超えて、努力してきたこと、人のわざを吹き飛ばしてくださいます。圧倒的な神の霊による恵みが実現します。目の前でイエスが十字架で殺されたとき、弟子たちは、もう絶対無理だと諦めま

した。イエスの宣教が失敗したから、もうこの世に救いはない。みんなが絶望しているその現場に、「突然激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえた。」と聖書は伝えていきます。神からの一方的な恵みです。誰もそれを予想して待つていませんでしたが、突然に降ってきたのです。神からの霊が「安心しろ、大丈夫だ。私が働く。怯えるな。」という音が天から響き、弟子たちの上に注がれたのです。その出来事は過去のことでなく、今もここで起こっていることです。私たちは諦めの心を払拭することができません。勿論、自分だけの力でそれを解決しようとしても無理です。聖霊を願うしかありません。人それぞれに大きな悩みもあるでしょう。迷いや悲しみが、絶望が心を支配してしまっている人もいるでしょう。神様に敵対する悪の力は、人を恐れさせて、無理だと思わせます。しかし教会には聖霊が働きます。聖霊の喜びに満たされま



神田キリスト教会の橋本司祭牧師就任式

す。もう駄目だ、無理だという時にこそ聖霊の力を信じてやって行く。教会は今日までずっとそれを信じ続けてきたのです。教会の誕生以来一日も欠けることなく続いてきたのです。想像をはるかに超える神の力を信じ続け、その喜びを世界に発信し続けて行きましよう。

自分自身の中でも働いています。時に様々な困難に遭う時、「もう駄目だ。」諦めの心が沸き起こってきます。神はどんな試練の日にも、私たちを励まし、力づけ、出

な音が天から聞こえた。」と聖書は伝えていきます。神からの一方的な恵みです。誰もそれを予想して待つていませんでしたが、突然に降ってきたのです。神からの霊が「安心

しろ、大丈夫だ。私が働く。怯えるな。」という音が天から響き、弟子たちの上に注がれたのです。その出来事は過去のことでなく、今もここで起こっていることです。私たちは諦めの心を払拭することができません。勿論、自分だけの力でそれを解決しようとしても無理です。聖霊を願うしかありません。人それぞれに大きな悩みもあるでしょう。迷いや悲しみが、絶望が心を支配してしまっている人もいるでしょう。神様に敵対する悪の力は、人を恐れさせて、無理だと思わせます。しかし教会には聖霊が働きます。聖霊の喜びに満たされま

# 大学生から学んだ教会の課題

―立教大学の講義から―

千住基督教会／葛飾茨十字教会 司祭 香山洋人

※昨年の下町教会グループ研修会「チャプレンの働き」の中で4名の司祭、聖職候補生の方から興味深いお話を伺った。今回、その時に香山司祭が話された立教大学での講義内容のまとめから、今の大学生がキリスト教に対してどのような思い、考えをいだいているのか、その一端を知る機会として、ここに掲載させていただくことにした。

2011年度「批判から学び直すキリスト教」を受講したのは約130人。大半は福祉、観光、心理の3学部の一、二年生ですが、全ての学部と学年が参加する「全学共通カリキュラム」の一コマです。聖書やキリスト教の魅力を一コマで表現する、あるいは第三者的な立場でそれらを解説するような授業ではなく、批判的論点からキリスト教にアプローチする授業です。企画と準備はわたしが行い、授業は空閑准教授とともに進めました。ゲスト講師の講義と討論、学生からのコメントに次回応答するという形式です。

キリスト教を知りもしない学生たちにいきなり批判かという心配の声もありましたが、単なる悪口ではなく責任ある参与としての批判が出発点です。「愛の反対は無関心である」というコルコタのテレサの言葉を紹介し、関心

を寄せればこそ批判的視点も出てくるのだ、仲間の欠点は大目に見るといふ馴れ合いではなく、痛みを伴いつつ批判的にかかわることは最も責任的な参与の仕方、深い関心と愛情のなせる業だという考えで授業は進みます。

「牧師の授業だからキリスト教の宣伝だと思った」という先入観で臨んだ学生は、「内部批判、自己批判を容認できるところがキリスト教の強さ、健全さだ」と気づきます。そして、これまで多くの宗教に抱いてきた疑問、嫌悪感の正体が、独善性、排他性、批判や疑問を許さない態度に対するものだったのではないかと考えるようになってきました。自分たちこそは正しいと思えば、ここに来れば救われると言わんばかりのメッセージに好感を持つ人は少ないはず。しかし、外から見るとキリスト教はそんなにけいかな

い集団と思われている、回を増すごとに率直になっていく学生たちの反応から多くを学ぶ機会でもありました。

批判といっても、その土台から全く否定するような批判ではなく、聖書の教えから逸脱した教会の現実や不自然な教理に対する批判が中心となります。ラス・カサス、ユング、ジョン・バチエラーなどの人物の他に、カルト宗教、しよがい者、ジェンダー、戦争、植民地主義、格差社会などがテーマとなりました。「宗教とは本来的に、暴力や抑圧を正当化するのはなく、社会的弱者の置かれた状況を是正し、すべての存在の自由と価値と尊厳を主張し、これらを実現すべきものである」という定義（川橋範子『ジェンダーで学ぶ宗教学』）を土台に、それに反する

現実を直視しながら、「だからキリスト教はダメなんだ」という次元から「人間それ自体の問題、貪欲さ、ずるさの問題」へと視点は移ります。そうなったとき、自分たちの弱点や欠点をごまかさず積極的に向き合っただけで済む姿勢、批判的アプローチが持つ健全さの意味が明らかになっていきます。

それまで内心感じていたキリスト教に対する違和感、嫌悪感を積極的批判というフィルターを通して掘り起こすことで、学生たちは次第に、単なる悪口ではなく責任ある関わり方の一つと

しての批判の重要性と困難さを理解します。そこからさらに、キリスト教あるいは人間にとって大切なことは何かというイメージを徐々に描き出すようになってきます。前半ではなかなかつかみきれなかったこの授業の趣旨が共有され、面白味が増してきた後半、空閑准教授の提案で学生たちにこんな問いかけをしてみました。

「キリスト教には様々な問題があり批判もされてきたのは学んだ通りだ。にもかかわらず、キリスト教は世界最大宗教であり、世俗化した先進国でも強い影響力を発揮し、多くの人を引き付けている。キリスト教徒にとっての信仰とは何だと思うか、なぜ人々は教会に魅力を感じると思うか」

客観的事実を調べよということではなく、自分はこう思うという意見を率直に書いてもらいます。外部の人々からクリスチャンはこう思われている、というデータ収集です。キーワードだけを抽出し便宜的に分類したのが以下のものです。

・なぜ人は宗教を必要とするのかという観点から

・不安を抱えた現代人にとって心の拠り所、とりあえず信じてみる／大震災など人知の及ばない苦難に直面すると神に祈りたくなるのが人間／人間には

「すぐるもの」が必要、宗教が無ければその代用品、たとえば家族、友人、ペット、モノ、言葉、スポーツ…にすぎない／所属するコミュニティが必要、居場所が欲しい／「何かを信じている」ということ自体で安心したい／裏切らない何かを求めている／死後の世界の安定を求めている／誰かに愛されたい／不可解なことに意味を見出したい／何かのきっかけで出入りするうちに人間関係が深くなり生活に欠かせない要素となつて結果的に参加度が高まるのが宗教というもの

・その中でなぜキリスト教が選ばれると思うか

・クリスチャンの家に生まれれば特にやめる理由がないから／キリスト教世界で育てばそれが自分の価値基準となるから／日本でもクリスマスなど生活習慣として広がりつつきやすい／キリスト教の学校の影響／先進国がキリスト教だから／植民地主義とグローバル化の結果キリスト教が広がった／歴史が長い宗教だから／世界最大宗教だし組織も大きく安心感があるから／批判者や反対派が弾圧された結果巨大化しただけ

・信者はキリスト教のどこに魅力を感じていると思うか

・親しみやすさ／人間味／分かりやすさ／完璧ではないところが魅力的／イ

スラームのように戒律が厳しくないから／自分の価値観を捨ててきなくてもいいから／多様性を認めてくれるから／「救世主思想」を求めるから／批判によつて鍛えられた内容の確かさ／安心してすぐれる絶対性／役に立つ教訓／イエスの教え／イエスの魅力（愛、赦し、人格全体）／宗教としての安定感（変わらない教え）／人間の普遍的な理想が描かれていて誰もが共感できる／直観的な善の感覚に沿いやすい／裁きと救いの両方で人々をひきつける／有名だから／キリスト教文化の華やかさ／洗礼というシステム／矛盾点がかえつて神秘的で魅力的／キリスト教の良い部分だけを見る人が多いから



受講した学生の自  
分はクリスチャンだと表明した（毎回提出するコメント用紙にそう書いた）学生は3人です。それ以外に特定の宗教に帰依していると表明する学生はいませんでした。つまり、いまだき宗教（キリスト教）なんかに参加するのは不思議なことでは理解できないが、想像するにきつとこういう理由があるに違いない、特にキリスト教徒はこんな理由で教会に行くのだら

う、と学生たちが推察した内容です。もちろん授業の流れの中で出てきたものですが、「教会外」からの貴重な声です。

ずいぶん見くびられたものだと思うでしょうか。なるほどそういう面もある、実はそういう面もあるかもしれないと思わされる内容もあるのではないのでしょうか。「人間味がある、完璧ではない、批判を認める」などをあげた学生たちは、この授業を通してキリスト教に魅力を感じた人々でしょう。神父だったラス・カサスが教会と対決する、クリスチャンだったユングが原罪の教理に反論する。こうした学びは宗教に寄せられる疑い（マインドコントロール）に対する答えにつながります。チャレンジャーがキリスト教の問題点を取り上げることへの驚きもあつたようですが、「かえつて安心した」、「まともな宗教だと思う」、「教会の説教よりこの授業の方が伝道的」という声も寄せられました。しかし、「ではなぜ先生はキリスト教をやめないのですか」という問いも提出されました。

この問いがなければ、なぜわたしはクリスチャンなのか、わたしにとつての信仰とは何かを語ることはできません。この問いなしに一方的に語り始めるもおそらく学生たちは耳を傾けてくれないでしょうし、一方的な宗教宣伝

だと思つて反発するだけではないでしょうか。キリスト教に対する批判に對し、そんなことは無いと抗弁したりこんなにもいい面もあるのだぞと反論するよりも、批判の重要性を積極的に認めてより良い方向への変革の努力を示す方が誠実だし真実味があるはずですよ。

悪意の中傷には返す言葉はありません。偏つた知識で揚げ足を取る人はより広い視点へと導く必要があるでしょう。そして教会を愛するがゆえにあえて苦言を呈してきた人々の声は傾聴に値します。キリスト教にとって最大の批判者はイエス・キリストだというわたしの立場は学生たちに理解されたようでした。学生の多くは、神は問いに答を与える存在、宗教は正しい答えを教えるものと思つていたかもしれませんが。けれども人間の問いに神は別の問いを投げかける、問いは神が発するものであり、宗教とはその問いへの応答の実践であり、この正解無きスリリングな問答は無限に続くだろう、とわたしは伝えたかったのです。

どんなに見当違いな回答にもめげない神は、また新たな問いで人間の良心を呼び覚まそうとする、それが聖書の神の愛し方だと思つて。このメッセージが伝わったかどうか、学生たちとの今後のやり取りが許されれば徐々にわかってくるかもしれません。

## 司祭と語る(一)

(その2)

司祭 竹内 謙太郎

今回は、長年の牧会経験と豊富な学問的知識を持たれている東京聖テモテ教会の竹内謙太郎司祭(嘱託)に、同教会信徒の荒川温子さんと飯塚哲二さんからお話を伺っていただきました。



— まずは先生が教会へ行くようになったきっかけから伺いたいのですが。

竹内 僕は軍国少年でね、終戦をむかえたのは中学2年の時。空襲ですべて焼け野原になり、行く所もなく目的も失った中で、若い人たちのたまり場になっていたのが教会だった。その頃行っていたのは家から歩いて2、3分の所にあつた東京諸聖徒教会で、僕はその幼稚園の出身だったから、ごく自然に行くようになったという感じかな。でも、若い

人はそのうち少しずつ教会から離れていったよ。

— そんな中で、どうして洗礼を受けられたのですか。

竹内 僕は、信徒でもないのに勝手に日曜学校の先生をしていたから、まあ、教会に捕まったという感じかな。そのうち当時の蒔田主教に「お前は洗礼を受ける」と言われ、受けることになった。

— 先生は慶応の出身ですが、どうして神学院に行かれたのですか。

竹内 僕は在学中から小山の修道院に行き断食なんかもしていたから、それで蒔田主教に「神学院に行け」と言われた。とにかく強引で、按手式もいきなり「来週するから」とか、神学院も「行くように手続きするから」という調子。

— 両親の反対とかは無かったのですか。

竹内 当時、うちの母が誰かに頼んで某大会社に就職が決まっていたから、ひっくり返るように反対されたよ。

— もし、神学院に行っていなかったらどうなっていたでしょう。

竹内 僕自身としては大学の時にイギリスの古い歴史について論文を書き、卒論も当時の

誰もやらないアングロサクソンの教会とローマ教会の論争について書いて、指導教授からは大学院に行かないかとか、イギリスで勉強しないかとか言われた。神学院に行かず、そっちを選択していたら学問の道に進んでいただろうなと思うね。

— そうですか。今の先生のアカデミックな原点はそこにあったんですね。

竹内 でも、神学院に行つて人生観が変わつたね。当時の西校長はアメリカの日系の二世だったけど、新しい戦後の神学教育のために5人くらいのチームを率いてやって来て、僕たちの年代は厳しく鍛えられたよ。

— 今の神学院のシステムとは全然違うのですか。

竹内 そう、授業は英語だし日本語の本なんてないから、英語の本を3、4冊渡され、来週までにそれについて論文を書けとかね、とにかく自分で勉強しなければ誰も教え、

## 【司祭の1冊】

『新たな旅立ちに向かう』

(渡辺正男)

日本キリスト教団出版局

2011年刊

司祭 山口千寿

著者は、三年前に引退し、今年、七五歳になる牧師職の方です。農村伝道神学校の教師を経て、日本キリスト教団の五教会で奉仕をして来られました。還暦を迎えてから専任牧師を迎えることが難しい小規模教会で仕えることを志し、二つの伝道所を教会になるまで導かれました。



前半は、週報に掲載された二四編の説教要旨、後半は、実際に礼拝で語られた説教十編が収められています。

「世阿弥の、『入舞』という美しい言葉が眼に止まりました。舞い人が、舞い終わって舞台から引き揚げる時に、もう一度舞台上に戻って、名残を惜しむかのようにひと舞い、舞ってから引き揚げる。その

ことを『入舞』と言うのだそうですね。老いの人舞ですね。」

(「まえがき」より)

著者の関心の在処を暗示する言葉ですが、実際の説教の中でも同じ言葉が語られています。「死と復活という新たな旅立ちに向けて、天上の祝福の希望を抱きながら、自分なりに、ほんの少しでも、主イエスに聴き従うような老いの人舞を舞ってみたい。そ

う願わずにはおれません。」(一二五頁) 教会

の高齢化が将来への不安材料のように語られます。しかし、そうでしょうか。老境に入った能の名手が、壮年の役者には及びもつかない深い境地に達した能を演じて観衆を感動させるように、信仰生活においても「老いの人舞」が、この説教集のように易しく優しく語られるならば、深い静かな喜びが教会の命を燃え立たせるのではないのでしょうか。

てくれないので、勉強の仕方は学んだよ。

― 司祭になられてから、すぐに海外に派遣されたら何っ  
ておりますか。

竹内 僕は後藤主教に按手された初めての司祭だと思っ  
けど、彼は面白い人で、僕に3  
つの選択肢を提示して、どれ  
がしたい？なんて聞くんです  
よ。それでコーネル大学に行っ  
てそこで一年半ほど働いた。

― その他にも韓国、中国、  
アフリカなどにも行かれてい  
ますが、特に影響を受けた人  
や、印象に残った国などはあ  
りますか。

竹内 コーネル大学の主任  
チャブレンには影響を受けた  
かな。学生との関わり方とか、  
とにかく伝説的な人だった。

国では自分で決めて行こうと  
思ったのはアフリカだね。70  
年代にこれからはアフリカの  
時代だと思い、そのために日  
本の聖公会は何ができるのか  
とウガンダに行った。でも帰っ  
てきたら、アフリカは遠すぎ  
る、韓国や沖縄のために働い  
てくれと言われた。

― 日本で影響を受けた人は

いますか。

竹内 やはり神学院の先生方  
と後藤主教でしょうね。特に  
後藤主教には便利に使われ  
たね。でも、多分それは僕の特  
徴を掴んでたんだな。だって  
当時、宣教師引き上げの時に  
聖公会の代表として若造のく  
せに交渉などもさせられた。  
生意気なことも言ったけど、



― 主  
教が言えないことを僕に言  
わせたんだよ。(笑)

― それは、きつと先生の良  
さを生かしてくれたんですね。  
これから先、まだやりたいこ  
となどはありますか。

竹内 いい本を探して日本語  
にしたいね。それも僕がとい  
うより、能力のある人に勉強

のきつかけを与え、その人を  
サポートしたい。

― 今の聖公会について何か  
思うことはありますか。

竹内 歴史にしても礼拝学に  
しても小さなトピックをかい  
つまんで何か言う人は多い。  
でも基礎を積み重ねて学んで  
いる人は少ないような気がする。  
僕の事を古いと言う人も

いるけど、海外に行けば古い  
と言われることからすべてを  
全部知っている人が一番先端  
的だったりする。すべてのも  
のには歴史があつて、何故そ  
うなるのかが分かる。

― 最後  
に若い聖職に望むこ  
となどあればお願いします。

竹内 礼拝一つにしても何故  
そうするのか、基本的なこと  
をしつかり勉強してほしい。

また牧師は常に思考回路を  
オープンに、創造力や想像力  
を働かせてほしい。こうだと  
決め付けてかかると失敗する  
ことが多いと思う。

― 今日  
はどうもありがとうご  
ざいました。

竹内 なんだか、これが活字  
になるかと思うとぞつとする  
ね。(笑) (文責・広報委員会)

ガリラヤ各地を巡り、多  
くの病人を癒されたイエス  
の評判が広がる一方、それ  
を快く思わないファリサイ  
派や律法学者の人々は、イ  
エスについて「悪霊の頭  
力で悪霊を追い出してい  
る」「汚れた霊に取りつかれ  
ているのだ」と

いううわさを立  
てていました。  
安息日の規定を  
はじめとして、  
律法についての  
イエスの姿勢は、  
すでに彼らの注  
目を惹いていま  
した。

しばらく前に  
《聖書を開いて》②  
見なさい。ここにわたしの母、  
わたしの兄弟がいる。

司祭 山野 繁子

さんの人々に囲まれ、話し  
が盛り上がっていたのかも  
しれません。群衆が互いに  
肩を寄せ合うような雰囲気  
で、イエスの話に耳を傾け  
ている最中でした。

「母上と兄弟姉妹がたが  
外であなただを捜しておられ  
ます」と知らされたイエ  
スは、「わたしの母、わた  
しの兄弟とは誰か」と逆  
に問い返し、周りに集まっ  
ている人々を見回して言  
われます。「見なさい。こ  
こにわたしの母、わたし  
の兄弟がいる。神の御心  
を行う人こそ、わたしの  
兄弟、姉妹、また母なの  
だ。」(マルコ3・34)多  
くの人々がイエスを囲ん  
で集まり、新しい生き方に  
向かって目を輝かせている  
様子が、マルコの描写を通  
してわたしたちにも伝わっ  
てきます。「神の御心に結  
ばれた家族」が、それ以後、  
多くの共同体を作り、現在  
でもイエスの祈りと力を受  
け継いでいるのではないで  
しょうか。

## カフェ・エクレシア訪問記

広報委員

読者の皆さんは司祭がマスターのカフェと聞いてどんなことを思い浮かべますか？ 昨年6月に開店後、間もないある夏の夕刻。

雨のせいかわつ暗く、直ぐには目指す店がみつからない。住所を頼りに歩いていくとほのかな灯りが見え、それが目指すカフェ・エクレシアであった。入口の扉に貼ってあるのはイベント案内。扉はカフェには珍しい引き戸。1、2段下がるとそこはもう李司祭の世界。牧師がマスターのカフェ？と勝手に想像した光景はあっさり裏切られた。質素ながら確かな目で選ばれたテーブル、椅子が並ぶ。壁には夫々物語がありそうな絵画、写真新聞記事など。「李司祭やるな！」とうならされる。サブライズはそれに留まらない。ベーグルをのせたプレート、コーヒーカップ、漂ってくるコーヒーの香り。李司

祭のこだわりがちりばめられている。長居歓迎のさしずめニューヨーク市、ソーホー地区のアングラカフェか。百聞は一見に如かずである、皆さん！

あれから半年、野次馬根性を發揮してその後の進展を確認しようとする。マスターの忙しい時間を避けて—toにかく働き手は一人しかいないのだから— 午後の昼下がり。入り口の雰囲気はそのままに、メニュースタンドが道行く人を誘う。ランチメニューにティーメニュー。

開店前とその後の変化について伺う。「経験そのものが学びである。色々試みてメインとサブになるものを見極め、メインプログラムとサブが支え合いながら基本的な経営が可能になる事が見えてきた。いずれメニュースレーターも発刊したいが、それは人材と資金が必要。理念を理解し、ある程度自主的に役割を果たせる人が必要である」どなたか手を挙げてみませんか？



宣教の前線での活動です。

「最も大切にしたい事が信徒神学講座。聖職者の不足が顕著な今、信徒が宣教にもっとコミットするためには神学を体系的に学ぶ事が欠かせない」。そのためにこの4月から始められた神学講座の受講生の数は目標の6名をはるかに上回る14名とのこと。待ちこがれていた講座のようである。継続中の韓国語講座は3つ、生徒数総計15名。現在も募集中。

今後の予定は、今秋ないし冬に車による移動販売の開始で、購入資金の積立を含めて準備中である。先ずは李司祭自ら一年間経験してノウハウを蓄積したいとのこと。開店当初の借入金も全額返済済みで、着々と前進していることを実感した訪問であった。

## カフェ・エクレシア

マスター 司祭 李民洙

2011年カフェ・エクレシアを始め一般のお客さんを迎えてからもう10ヶ月がたちました。何もかも一人でしなければならぬ状況の中、経済的自立のために必死で働きました。しかし、考えてみると、一人でやったのではありません。沢山の方々が献金、祈り、カフェへの訪問など励ましがあつたことが先ずありました。浅草聖ヨハネ教会の方々ははじめ、教区の関係者および直接・間接的にかかわってくださった全ての方々に心から深く感謝いたします。何より、神様は私を一人にさせず常に見守ってくださっていることを身をもって感じていきます。

カフェ・エクレシアは自由の霊性を求め、「Commensalis」(Sharing of the Table)の宣教理念の実現を目指しています。自由の霊性は神様が人間に与えてくださった想像力を活かすようにと励ましてくださる

のだと感じています。カフェとしての美味しい食べ物と飲み物、さまざまな文化活動、研究会など学問的作業、それに祈りと黙想会などがバランスよく行なわれること。そしてこれら全てのプログラムが「Commensalis」(テーブルを分かち合う、テーブルは食卓、聖餐式のテーブル、として解釈することはもちろん、神様が私たちに与えてくださったこの地球そのもの、自然そのものをも意味します。)の宣教理念にまとめられることを目指しています。まだ、安定するまで時間がかかるかと思つていますが、何となくこの1年間の経験を通して少し目処が付いてきました。今年の年末ごろには、カフェを企画する初めから考えていた計画のためにもう一歩踏み出したいと思つています。今、そのために全力を注いで準備しています。それは移動販売車の購入で、私自ら直接移動販売車の中で販売したいと思つています。お楽しみとして関心を以て祈ってください。

## 第1回U26集会

聖アンデレ教会 鈴木みのり

管区の青年活動グループ「U26 (ゆーじろー、26才以下の青年)」の集まりが、今年の2月17・18の2日間、各教区から34名が集まり千葉の少年自然の家で行われた。

今回の集会では、二日間にわけて「若者が教会に行く理由・行かない理由」と「各教区で行っている活動・これからのような活動をしていきたいか」について話し合い、各自でまとめて発表しました。

まず、なぜ教会に行きたいと思うのか。少数グループで分かれて議論していると、私が思いもしなかった面白い意見がたくさん出てきました。全員に共通したのが、以下の二つの理由です。

まず一つめは、神様にお祈りを捧げ懺悔するのが大切なことだと思ふから、というものです。これは、全員が共通して一番初めに出した意見でした。自分の行いを見つめなおし、心を清めるために教会

にくるのは必要だということでした。

二つめの意見は、教会の間たちと交流をするために行く、というものです。教会でしか会えない人たちと礼拝のあとにたわいもないおしゃべりをするのが楽しみだということでした。

また少数派の意見の中には、聖歌をきくのが好きで、聖歌を聴きたいから毎週教会に行く、というものもありました。単純に聖歌をきくと心が癒されたり、元気になったりするのだそうです。また、小さいころから毎週日曜日は教会に行くのが当たり前になっていたもので、日常の習慣として毎週教会に行っている、という意見もありました。



そして、私たちが注目していた若者が教会に行かない理由は、話し合っていくうちにひとつの結論にたどり着きました。

それは、小さいころに教会に来ていた子供たちも、中学、高校に上がるにつれて部活やバイトなどで忙しくなり、日曜日の午前中に礼拝に出るよりも優先するものができ、若者の中で教会という場所がそれほど魅力的では無くなってきているということです。教会に行くよりも、友達と遊んでいたほうが楽しい、バイトをしていたほうが学べることが多い。そんなシンプルな理由から若者は教会に来なくなるのだという結論になりました。つまり、私たちU26のこれからの課題は、若者の教会離れを防ぐために、若者から見ても教会が魅力的なものにするにはどうしたらいいのか考えることだと思えます。

## 夏の「合同こどもキャンプ」

東京教区日曜学校連絡会では、8月10日(金)から12日(日)にかけて、清里フォレストスターズ・キャンプ場を会場に、「合同こどもキャンプ」を行います。へあそぼう、みつげよう、清里の森で」というテーマのもと、参加する子ども達が、キャンプのプログラムを通して、また自然の中で、大切な気づきと体験をしてもらいたいと願っています。

東京教区日曜学校連絡会  
合同こどもキャンプ  
あそぼう、みつげよう、清里の森で  
日時：8月10日(金)～12日(日)  
場所：清里フォレストスターズ・キャンプ場  
参加対象者：未就学児・小学生・中学生【保護者参加可】  
費用：幼児1万円 小学生1万5千円 大人1万9千円  
定員：60名  
主催：東京教区日曜学校連絡会  
※東京からバスで一泊に行きます。  
5月に配布される申込用紙を用いて、5月5日～7月15日までにお申し込み下さい。  
問合せ先：東京聖三一教会 (03-3421-3646・司祭 高橋顕)

達の楽しさに輝く笑顔を思い浮かべながら、安全で楽しいキャンプの準備を進めています。このキャンプを企画し主催する東京教区日曜学校連絡会は、東京教区信仰と生活委員会のかつての子ども部会から、発展的に活動を始めた自主活動です。「子どもの声が溢れる教会」を目指し、各教会の日曜学校の働きが深められることを目的として、情報交換、学

このキャンプの目的は三つあります。参加者に自然の素晴らしさをたくさん知ってほしいということ、友だちに出会ってほしいということ、そして神さまといっしょにみんなであそぶ喜びを感じてほしいということ。このキャンプの開催に向けて、現在スタッフ達は、参加することも

びのプログラム、交流行事の開催等の活動を行ってきました。この夏の「合同こどもキャンプ」を通して、こども達と教会の出会いがさらに強められ深められますことを願っております。「合同こどもキャンプ」の開催を覚えてお祈り下さい。

スタッフ代表・司祭 高橋顕

## 《6月の奉献先から》

### 東京教区の神学生

3名の新入生を迎えて聖公会神学院の2012年度が始まった。1年生から3年生まで全学年が揃うのは4年ぶりのこと。自然と心組み、時には歌など口ずさんでいる自分に気付いて苦笑する昨今である。聖公



会神学院の空気はとて良くなったと思う。空気が良くなると風通しも良くなり、人間もおのずと良くなるはずだ。そこで切磋琢磨し、精進する。これもまた悦びである。今の神学院、大変な財政難の中にあることを知っている方もおられるだろう。と言っても、お金の問題はたいしたことはない。問題は人だ。これは私の信念でもある。少なくとも人に恵まれること、これほどありがたいことはない。

さて今日与えられたのは、「東京教区の神学生」という誠

にカタイ題である。それを力たくなく、面白く書くようにという編集者の難しいお願いなのだ。そこで仕方なくこんな風に書き始めたのだが、私が言いたいのはこのすばらしい「人」の中に、もちろん東京教区の神学生、阿部ゆりさん、太田信三さんもチャンと入っているということだ。字

数の関係で具体的に紹介できないのは残念だが、二人の努力と真剣さと真面目さ、暖かく、ユーモア溢れる人柄を知っていたいただきたいと思う。褒め過ぎと思われるかもしれないが、校長の私が言うことなので本当であることは間違いない。この二人を支援し、理解し、私たちと共に育てていただきたい。これが皆さんへの私からのたつてのお願いである。

〈花散るやチャペルへ急ぐ〉

神学生 和文

聖公会神学院 校長

司祭 広谷和文

## 《7月の奉献先から》

海の主曰って何？

「海の主曰」は、年に一度

「船員」という仕事に従事している人々へ感謝を捧げる日である。何故なら、我々の身近で毎日必要とする食物・衣類を始め、機械部品や燃料など、すべては船員達によって海から運ばれてくるからだ。

船員達の多くはアジアの国々からやって来、常に高い技術と仕事への熱意をもって働いている。しかし現実には、長期間家族や友人と離ればなれになり、更に上陸できるのは2〜3時間程度などといった過酷な労働条件下に置かれている事が多くある。

こうした状況を踏まえて、

The Mission to Seafarers, Stella Maris やキリスト教系のボランティア団体は、船員達を支援する以下のような活動を行っている。

- ・船員を歓迎し慰問する訪船活動
- ・船舶から関連施設へのバス送迎サービス
- ・施設内における通信機器の使用を提供する

・施設内の遊戯具の利用や、寄付された衣類等の無料譲渡やラウンジでの飲料サービス

・常設のチャペルと日曜礼拝及び船舶への牧師や神父の派遣等

そうして、これらの活動に不可欠なのが、船員達に対する温かい歓迎と笑顔である事を思い出してもらおう日が「海の主曰」である。

船員への支援は教会にとって重要な仕事であり、他の活動と同じようにやりがいがある。

るといふ事を改めて皆で考えて欲しいと思う。

実際の活動に参加できなくても、「海の主曰」は、ぜひ船員達のために祈りを捧げよう。

神戸教区聖職候補生

ポール・トロハースト

### ◇編集後記◇

今回掲載した香山司祭、鈴木みりさんの文章は今の若い人たちの思いを知る助けになると思います。長年教区事務所勤務かれ広報でも大変お世話になった麻田奈々子さんが3月末で退職されました。この場を借りて感謝を申し上げます。(W)

## あっと雷書、ときどきユーモア (一)

### 1. 炎の舌?

信徒 A 「聖霊降臨日には、弟子たちの上に炎のような舌がとどまったという不思議な出来事がおきたんだよね。」

信徒 B 「それなら僕もそんな体験をしたよ。」

信徒 A 「君も聖霊体験をしたのかい。」

信徒 B 「いやこの前、激辛カレーを食べたら、舌が炎のようになったんだよ。」

### 2. 季の多い説教

信徒 「先生、今日の説教はすごく学びの多い説教でした。」

牧師 「それは嬉しいですね。よかったら、どんなところが学びになったか聞かせてください。」

信徒 「そうですね。人の話を聞くことの難しさ、理解することのたいへんさ、それになにより忍耐を学びました。」

### 3. 仲良しの秘訣

牧師 「あなたたちのご夫婦は、いつも仲がいいですね。何か秘訣でもあるんですか。」

信徒 「特に秘訣はありませんが、お互いイエスの教えを守っています。」

牧師 「ほう、それはいったいどんな教えですか。」

信徒 「はい“あなたの敵を愛しなさい”です。」